



TITLE:

雍正硃批諭旨解題：その史料的价值

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

CITATION:

宮崎, 市定. 雍正硃批諭旨解題：その史料的价值. 東洋史研究 1957, 15(4): 365-396

ISSUE DATE:

1957-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145899>

RIGHT:

東洋史研究

第十五卷第四號 昭和卅二年三月發行

雍正硃批諭旨解題

——その史料的价值——

宮 崎 市 定

- 一、緒 言
- 二、雍正という時代
- 三、奏摺政治の出現
- 四、奏摺と硃批
- 五、題本と奏摺
- 六、硃批諭旨の價值
- 七、奏摺政治と軍機處

一 緒 言

雍正硃批諭旨は私が最も愛着を感じている書物の一つであり、また私との間にそれだけ因縁の浅からぬものがあると思われる。いまこの書の解題を試みるに當り、先ずこの書と私との個人的な關係から説き起すことについて豫め讀者の宥恕

を請うておきたいと思う。

敗戦後、間もない頃、私は十一朝東華錄全部を始めから讀破して見ようと思ひ立つた。さて天命から始め、順治、康熙を経て雍正朝に及ぶと、何かしら世の中がすつかり改まつたような感じを受けた。それは突きつめると雍正帝という天子のもつ個性が大いに影響していることが分つた。そこで雍正帝のことが知りたくなつて探しあてたのが即ち、この「雍正硃批諭旨」に外ならない。昭和二十二年の夏休み中は、よみかけた東華錄の繼續を抛擲して、ひたすら硃批諭旨に讀み耽つたのであつた。その翌年と翌々年の京都大學における特殊講義は「雍正帝とその時代」と題し、更にその翌年、昭和二十五年年には岩波新書の一として「雍正帝——中國の獨裁君主——」を出版した。わざと進んでこのような、あまり賣れそうもない天子を對象に選んだのは、書いて見たくてたまらなかつたからである。

雍正硃批諭旨は從來も屢々清朝史研究家によつて利用されてきた書であるが、その利用の仕方は斷片的、氣まぐれであつたようである。また雍正という時代、雍正帝という人も、單に康熙と乾隆の間に挟まつた過渡の時代の過渡の天子としてしか評價されていなかつたようである。それについては次のような珍談すらある。

日本の帝國主義華やかなりし頃、曾て北京の日本公使館に、所謂支那通を以て自任する數名が會合し、四方山の雜談を試みた時、たまたま談は雍正年間の事に及んだ。時に一人が雍正という年號は何時であつたかと質問を發した。座に一人の支那歴史家を以て自ら任ずる者があつて、それは清朝の初期、康熙の後、即ち乾隆の前の年號であると説明した處が、同席の似而非支那通の男がこれを遮つて、いやそんな事はない、清朝初期の年號は誰も知る如く、康熙乾隆といつて、此の二つは連續しているのである。其の間に雍正が割り込むべき餘地はない。察するところ、雍正は明朝の年號であらうと、傍若無人に説いたので、歴史家はひた呆れに呆れて開いた口がまだ塞がらぬ間に、他の連仲は一齊に此の似而非支那通に雷同し、成る程、康熙乾隆とは人口に膾炙した連續した年號だ、歴史家先生は何かの思い違いをしているのであらうと宣告して、終に雍正を明の年號にして仕舞い、歴史家先生の説を錯誤として（多數決で）葬つたのである（伊東忠太建築文

献第六卷、漫筆、多數決。

私はこの挿話を大へん面白く思い、拙著「雍正帝」の序文に一度書きこんだのであるが、同僚たちに見せて意見を求めたところ、一般向きにはそんなに面白い話ではないと冷まされ、多數決で否決されてしまったので、とうとう序文の中から削除せざるを得なかつた。

所で我々の考によると雍正帝はその治世は僅かに十三年に過ぎなかつたが、この時代こそ清朝の國內的基礎の定まつた時であり、帝の人物は清朝で随一、父の康熙帝も子の乾隆帝も雍正帝に比べると一だん落ちて見えるというにある。私がいま我々とことさら複數形に言いかえたのは、聞いてみると同僚の安部健夫教授も全く同一意見だつたからである。實は雍正硃批諭旨を讀破したのは安部教授の方が私よりもずつと早かつたらしい。そこで安部教授と相談して同志を募り、雍正硃批諭旨を徹底的に讀み直し、史料をカードに取つて分類し、雍正時代史という中國史上の一時期の詳細な斷面圖を作つて、そこから清朝史乃至は中國史を理解する一助にしようという結論になつた。そのために毎週金曜日の午後を原文讀讀の時間にあて、昭和二十四年から始まつていま昭和三十二年まで、八年間續いてきている。我々の仲間の講讀ではこれ程長く續いた事業は外にない。夏休みも冬休みもなくぶつ通しに續けた年もある。年の暮のおし詰つた日まで人文科學研究所の會議室を使つて、事務室から火の用心が悪くて困ると抗議を申込まれたことすらあつた。これは雍正硃批諭旨というものの自體が餘程面白い書物である證據にもなるので、そうでもなかつたならば、こんなに熱心にやれるものではない。そこでそろそろ文献學的研究を脱して歴史として纏めて見ようと思ひ、昭和三十一年度には文部省の科學研究費の補助を受けて「雍正時代史の綜合的研究」に取りかかることにした。

我々が最初にテキストの底本に用いたのは人文科學研究所藏の木版本であるが、これを京都大學文學部藏本と比べると形式に多少差違がある。また別に石印本があつてテキストとしては石印本の方が正確なので、前二種の木板本は何れも原版でないことがわかつた。原板は殷版であるに違いなく、その殷板雍正硃批諭旨をどうかして入手したいと望んでいた。

ところが昭和二十九年の夏、別の要事で上京した折、東京大學の正門から學士會館に向う途中、森川町の古本屋を覗いて歩いてゐるうちに、ふと、うす汚なく傷んだ書帙がうす高く積まれているのを見受けた。何かと思つて帙を開いて見ると、それが紛うかたなき殿版の雍正硃批諭旨であり、十八帙百十二厚冊が全部揃つていたのである。書肆の話では、數日前に廣島方面から入荷して、昨日から店に列べた所だと言う。早速京都へ飛んで歸つて代金八萬圓の調達に奔走し、同僚の好意でやつと文學部へ買い受けて貰つた。全く雍正帝の神靈が作用を及ぼして引合せてくれたとしか思われぬほどの偶然の邂逅であつた。所で殿版を検すると、他の版で文字に疑問のあつた所は、この版によつても解決できない所がある。そして殿版と雖も文字の誤りが絶無でないことは、氷麩を氷麩と誤つてゐることによつても證明される（第二冊、齊蘇勒、雍正三年九月初十日條）。こうして殿版を始め數種の雍正硃批諭旨を利用することができるようになつたのは我々の大なる幸福である。

雍正硃批諭旨は朱墨二度刷りの美しい本である。墨字の部分は臣下の上奏文であり、地方の文官は總督・巡撫より布政使・按察使・道員に至るまで、武官は提督、總兵などを含み全部で二百二十三名がその上奏者である。これに對して墨字の行間、或いは上奏文の最後に雍正帝の朱筆による批文、即ち硃批がつけられている。されば硃批諭旨なる名はこの書の全體を現わすものでなく、實際は雍正間地方大吏の上奏文と、雍正帝の硃批諭旨とを合體したものである。史料としての價值は勿論、墨字の部分たる臣僚の上奏文の中に多く見出されるが、併しそこに天子の硃批諭旨が附加されていることが、その史料價值を一層増大する結果となる。更にまた硃批諭旨の部分はそれだけで獨立した史料の價值を有することも十分期待してよい。

ここでことわつておかなければならぬことは、墨字の上奏文は普通の上奏文ではなくて奏摺という形式をとつた文書であるという點である。それは普通の上奏文が題本という形式で、通政司を通して天子に到達し、中央政府即ち六部・内閣で公けに處理されると違い、此れは言わば天子に宛てた個人的な親展狀であり、裏口から直接天子の手許へ届けられ、

また天子個人によつて處理されるものなのである。こんな制度がどうして成立し、いかにそれが活用されたかという問題は、雍正硃批諭旨を讀むために必要な智識であるが、同時にまたそれは雍正硃批諭旨を讀んで始めて會得できることもある。私はこの問題に入る前に、雍正帝とその時代についての概略を述べておきたいと思う。

二 雍正という時代

雍正帝は清朝で太祖から數えると五代目であるが、中國を平定して全土に君臨した順治帝から數えると三代目に當る。よく言われるように君主政體の下では三代目でその王朝の盛衰が決定される重要な轉換期に立つものである。雍正帝は正しくこの三代目に當り、見事に三代目たる役目を果たした英主である。清朝の政治方針は大體においてこの時代に確定されたと言つてよい。清朝制度の特色たる皇太子密建の法、軍機處の創立、養廉銀支給の原則などは凡て雍正帝が定めたものである。

然らば雍正帝が直面した三代目の仕事とは具體的に言つて何事を指すであろうか。私の考えでは同じ三代目と言つても、異民族から起つて中國に君臨した三代目には獨特な三代目の役目があると思う。それは異民族的な原始體制から、中國的な獨裁君主制への切換えという事業である。

滿洲時代の女真人は一種の氏族制度を保持していたことは疑いない。さて彼等の氏族制度は進歩した中國近世の社會に侵入すると必然的にその社會に發達した獨裁君主制を採用しなければならなくなるが、この場合、一足とびに氏族制から獨裁制へ飛躍することはできない。それは恰も動物學で言うように、個體發生が系統發生を繰返すといった形式で實現される。即ち滿洲民族は極めて短期の間に中國三千年の歴史を繰返さなければならなかつたのである。もつと具體的に言うこと、もしも氏族制で古代を代表させるならば、次に中世的な封建制を經過して後に、始めて近世的な獨裁制に移行することができたのである。もちろんこの發達過程は自然發生的に内部から沸き上つたものでなく、寧ろ外部的な刺激によるも

のであつたから、實際の場合は著しく混亂した發達を辿り、前後矛盾したり撞着したりしながら、最終の結論に到着したのであつた。

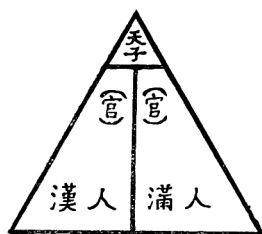
滿洲時代の太宗から、入京後の順治帝を経て康熙帝の初年まで、清朝政權には著しい封建色が現われている。當時の滿洲民族の最も自然な考え方から見れば、清朝政權は當然次の如きものでなければならなかつた。

先づ天子を中心點として、皇族たる宗室が一つの小圓を描いて座席を占めている。宗室は天子より下ること一等であるが、その地位は時の天子より賜つたものではない。それは天子が歴史的所産であると同じように、彼等の地位もまた歴史的所産なのである。むしろ天子なるものは宗室から天子たる地位を確認されての天子なのであつて、従つて天子は宗室の特權を尊重し、これを保護すべき任務を負うものである。言いかえれば天子は宗室の象徴であり、その共有物でなければならぬ。故に宗室は清朝の政治に對して特に大なる發言權を有し、その責任が大であると共に、それに相應する利得の分け前を受ける權利を認めて貰わねばならぬ。

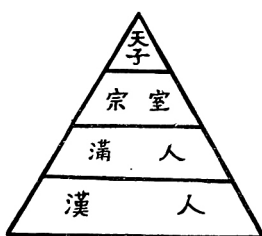
宗室が描く小圓の外に滿洲人が中國を描いて座席を占めている。宗室と一般滿洲人との間には權利・義務に關して一等の差があり、この差は、前述の天子と宗室との間の差と同一性質のものである。同様にしてこの滿洲人の中國の外に漢民族が置かれて大圓を形造つている。漢民族はその權利において滿洲人よりも一等級低く、その義務において滿洲人よりも一段と重い。但しこの場合、漢人あつての滿洲人ではなく、滿洲人は歴史的權利として、漢人の上に臨み得るのである。

いまこの三種の圓を側面から見ると、それは天子を頂點とするピラミッド型をなし、上層には宗室が居り、中層には滿洲人があり、下層底邊には漢民族が居ることになる。各階層は夫々その上層に對して奉仕を捧ぐべき義務がある。以上が當時の滿洲人が胸中に描いた清朝政權の理想的な在り方であつたであろう。

このような階層的な、封建的な體制は、中國社會においては既に遠い昔に經過し去つたことである。中國近世の獨裁君主體制の理念は、君主と人民との間に特權階級が割りこむことを否定する。獨裁君主の立場からすれば人民を支配するも



(2) 独裁制



(1) 封建制

のは君主一人でなければならぬ。ただ人民の数が多いのに対して、君主は只一人であるから、人民を治めるためには官僚の手を借りなければならぬ。但し官僚は君主から見ても單なる手傳い人夫であるべく、官僚がブロックを形成して君主と人民の間に介在して特權階級化してはならぬ。天子と人民との間には長い距離がおかれるが、それは單に天子の尊嚴を意味するだけであり、途中で何等妨害を受けることなしに一直線に意志が疎通しなければならぬものである。故に官僚は最も傳導力に富んだ電線であるべくして、自らが發電したり電力を消費したりしてはならぬものである。

但し清朝は滿洲の異民族から興起したという特殊な歴史的環境によつて、獨裁化した場合の清朝天子の地位を考えると、それは必然的に二重性格を帯びてくる。即ち清朝は滿洲民族の天子であると同時に漢民族の天子でもある。もともと別種な滿洲民族と漢民族とは共通な天子を戴くがために、言わば兄弟の關係に立つに至つたのである。清朝の天子が口癖のように滿漢一家と言う意味は、全く區別がなくなつたというのではなく、區別ある別種のものが、赤の他人ではなくなつたという意味に外ならない。

そこで清朝の天子は滿洲民族と漢民族という二本の支柱の上に立つ主權者である。この兩民族を人民として支配するためには官僚が必要であるが、その官僚は特權階級を形造つてはならず、線のように幅を持たず、管のように中味をもたぬ存在でなければならなかつた。

清朝初期の歴史は君主權伸張の歴史であるが、君主權伸張とはもつと具體的に言へば、上に述べた第一形式の封建制から、第二形式の獨裁制への移行に外ならない。太宗の兄弟に對しての迫害や、順治帝の睿親王家に對する特權剝奪、康熙帝の權臣鰲拜の誅殺などの事件は何れもこの線上に沿うて不可避的に發生した悲劇である。その結果として康熙帝の末年には同一天子による數十年の繼續支配という個人的事情も加わつて、大體において中國的な獨裁

君主制に近い形式が成立したと見られるのである。

雍正帝はこのような清朝の歴史を背景として即位したのであるが、個體發生が系統發生を繰返すという原理は、雍正帝個人の場合にも適用されなければならなかつた。即ち清朝がその初期短時日の間に、中國社會何千年の歴史を縮少して経験しなければならなかつたように、雍正帝はまたその即位の初期數年間に、清朝の歴史數十年分の縮圖を経験しなければならなかつた。そしてこの線上に沿うて行われた悲劇は、雍正帝の兄弟の阿哥達や、宗室の蘇努一家に對する迫害、大臣隆科多に對する彈壓などに外ならなかつたのである。

既に清朝の歴史によつて獨裁制の輪郭が成立した後のことであるから、雍正帝の個人的な努力は獨裁制の確立について容易に成果を擧げ得べき筈であつたが、事實は必ずしも然く簡單には參らない。それは宋以後の中國における近世的獨裁制は理念の上では完成していたが、現實の上では決して完全に實施されていなかつたからである。そして君主獨裁制の實施を阻んでいたのは、官僚の特權階級化であり、官僚の特權階級化は彼等の間における私的な團結によつてのみ出現することが可能であつた。この私的な團結が甚しくなると、それは中國流の言葉で言うところの朋黨に外ならぬのである。

中國獨裁制の理念から言えば、官僚はその地位を恩恵によつて臨時に天子から與えられた單なる天子の補助機關であり、天子と人民との間を連絡する送電線か通氣管に止まつて居なければならぬ。従つて官僚は個々に天子に直屬すべきものであつて、官僚同志が互いに横に連結してはならぬものである。若しも彼等が横の連結を成就すれば、官僚は一つのグループを結成し、官僚自身の利益のために自主的に行動するようになる。人民の上に特權をもつ者は天子だけであり、天子の前に出てはあらゆるものがその光輝を失つて平等の存在と化するのが獨裁制の窮極の理念である。然るに實際においては獨裁君主たるべき天子と、その人民との間に官僚なる特權階級が出現して半封建的な階層社會が成立し、更に天子の獨裁權を侵害しそんな危険が絶えず存在する。獨裁君主はその獨裁權を阻むものに對しては常に鬭争し續けなければならない。故に中國近世の歴史は獨裁君主と官僚との絶えざる暗鬭の歴史であるとも見ることができる。そしてこの點で清朝初期か

ら康熙帝に至る歴代の天子も、いま問題とする雍正帝の場合も、決して例外ではあり得なかつたのである。

康熙帝はその即位の始めからその死に至る晩年まで、絶えず官僚間の朋黨に悩まされ續けた。殊にそれが皇太子問題と絡んで發生したために、帝の悩みは一層深刻であつた。而して雍正帝が即位した後と雖も、この形勢は遽かに消滅したわけではなかつた。雍正帝がその兄弟なる阿哥たちを壓伏すると共に、官界の大立物であり、政界の大ボスたる漢軍出身の大將軍羹堯を誅戮したのは、朋黨比周の惡弊に對する彈壓に外ならなかつたのである。

雍正帝こそは中國近世の獨裁君主制の理念を體現し、世界の歴史においても稀に見る優れた獨裁天子であつたが、このことは彼がある程度、官僚の私的團結を解散し、その個人個人を自己に直屬させ、思うがままに之を頗で使つて妄動させなかつたことを意味する。そしてこの困難な事業は單に天子の權力で官僚を威怖させたばかりで達成できるものではない。そこにはそれだけの策略もあり、準備もあり、同時にまた根氣と、誠意とが必要であつたことを見逃してはならない。

三 奏摺政治の出現

雍正帝は即位の翌年、雍正元年春正月朔、諭旨十一道を天下の官僚に頒つてゐるが、これは總督、巡撫、督學、提督、總兵、布政司、按察司、道員、副將參將遊擊等官、知府、知州知縣の各官に對し、夫々の心得を諭したもので雍正帝の施政方針を闡明したものとするべきである。この中で共通に言及していることは當時の言葉として、名實兼收といわれている弊風を指摘して戒めている點である。雍正帝は言う。

今の官に居る者は、譽れを釣りにて以て名を爲し、家を肥して以て實を爲し、而して名實を兼ね收むと云うなり（實錄・東華錄同日條）。

ここに名と實とを對立させてゐるが、實際は同一物の半面ずつである。何となれば名とは官僚社會における顔のことであつて、顔が利けば好い地位が獲られ、好い地位からは富が得られて家を肥やす實を収めることができ、富があれば再びそ

れが資本となつて顔を廣くすることが可能だからである。官僚生活においては顔、即ち名譽が大切な資本であつて、富と表裏するものであるが、この名譽は主として交際によつて得られるものである。學問は交際的手段としてのみ意義が認められ、政治も交際のためには犠牲に供せられる。こんな官僚のために交際費を負担する者は、結局は外ならぬ人民であり、惡政のために最も苦しまねばならぬ犠牲者もまた人民に外ならぬ。そしてこういう人民の怨嗟に對して最後の責任を負うのは天子一人である。官僚はいよいよ形勢が悪くなれば降参しても助かるし、寢返りを打つという手も残されているが、天子ばかりは實權を失えば王朝と共に滅亡しなければならぬ。天子と人民を犠牲にして官僚が名實を兼ね収めることは許すことができぬ、という決心を示したのが雍正帝の改元年頭における十一道諭旨の宣布であつたのである。

雍正帝は最も官僚の横の團結を憎んだ。官僚が横に團結してしまえば天子は自然に人民から浮上り、天子の獨裁權は官僚の手中に握り潰されてしまう。それがいわゆる官僚の朋黨が招く不可避的な結末なのである。

朋黨の弊は中國史上に古くから現われている。宋代以來の獨裁君主は神經質と思われ、ほどに官僚の朋黨を警戒し彈壓している。然るに宋の名臣、歐陽脩に朋黨論なる一篇がある。歐陽脩によると、世間で「朋黨を組むのは小人の習いで、君子は朋黨せぬ」といつているのは誤りで、小人は利害で結合するからその結合は永續させず、君子は道を同じくする者同志が集まつて朋をつくるから、その團結は堅いのだ、というにある。

これに對して雍正帝は雍正二年七月に御製朋黨論を作つてこれを諸王大臣に頒ち、歐陽脩の説を邪論だとして黜けている。帝によれば、歐陽脩のいわゆる道も、煎じつめると小人の道であつて、歐陽脩のこの論が出てから小人共はいよいよ同道の名を假りて朋黨するのを憚らぬようになつた。實際は君子には決して朋がなく、朋をなすのは小人に限る。若し歐陽脩をして今日にあらしめたなら、朕は必ず之を飭めてその惑を正してやろう、というのが新朋黨論の要である。

朋黨は排斥すべきものであるが、尨大な官僚群が官僚制度によつて組織され、上下の統屬關係によつて一絲亂れぬ體系を保つことは是非必要である。これを地方制度について言えば、上に總督・巡撫があり、次に布政司・按察使の兩司があ

り、次に道員があり、次に知府があり、最後に知州・知縣がある。中央の命令はこの順序で下達するし、地方末端の事務はこの逆の順序で上達し、總督・巡撫の手で中央へ轉達される。このように總督・巡撫の權限は絶大であるので、獨裁君主としては、これを頭とする地方官僚體系が、そのまま固定して封建的な上下關係になり、地方が分離し出すことを防がなければならぬ。

總督と巡撫は天子から地方に派遣された、その管内の省の政治の最高責任者であつて、彼等は地方の事務に關して天子に報告を行い、或いは指令を求めることが許されているが、これに二様の形式があつた。一は題本（また本章）と言ひ、言わば公的な文書であるが、一は奏摺と言ひ、私的な文書である。

題本は總督・巡撫が省の長官として、公務をもつて天子に送る文書である。そこで題本には官印を捺して公人たる資格を明かにする。この文書は驛遞によつて北京へ運ばれ、通政使司という官衙を経て内閣に送られる。内閣はその文書の副本を手許に留め置き、正本を天子の手許に届ける。天子は内閣大學士を宮中に招いてその意見を聞きながら、文書の處置を定め、夫々の事件に裁決を與える。この決定は夫々の性質に應じて六部はじめ關係衙門の意見を徴した上で行われるが、決定した上は擔當各部から地方の總督・巡撫の許に通知され、總督・巡撫から末端官廳へ轉達されるのである。これらの往復は凡て公文書で行われ、特にこのように總督・巡撫から題本によつて内閣を通して天子に報告さるべき事件は題達事件と名づけられる。財政、司法、行政に關して依るべき法律や先例があつて、それに従つて處置することのできる事件は概ね題達事件に屬する。

然るに總督・巡撫はこの外に言わば私的に、個人として天子に文書を提出することができ、これを奏摺と言ふ。それは時には任地へ到着した報告であつたり、年賀や時候の見舞いであつたりして、これを請安摺と言ひ、或いは極めて秘密を要する事件の内報であつたりして、これを奏事摺と稱するが、何れも中央政府の官吏に知らせる必要がなく、又は知らせてはならない事柄で、單に天子にだけ見て貰えばよい文書である。従つてこの奏摺は言わば總督・巡撫から天子に宛てた

親展状とも言うべく、これには官印を捺す必要がない。

以上のような制度は清朝の國初から既に存在したものと恐れ、近年北京の故宮から發見された康熙時代の奏摺には種々の面白い史料があり、それらは文獻叢編、明清史料、史料旬刊などの名で逐次公表されている。

雍正帝がその獨裁制を確立し、地方の官僚の朋黨の風を禁じ、個々の官吏をして天子に直屬せしめるために利用したのはこの奏摺の制度である。從來地方の官僚で天子に奏摺を奉るのを權利として認められたのは總督・巡撫であるが、非常特別の場合にはその他の諸臣も秘密に上奏を行うことができた。但しそれは極めて特殊な場合に限られていたのであるが、雍正帝は總督・巡撫に限らず、布政司、按察司、提督、總兵は勿論、道員、知府のある者にまで、進んで天子に奏摺を上ることを要求したのである。

地方官として赴任する知府以上の官吏は先ず宮中に招かれ、天子に謁見させられる。その際に天子は地方政治のやり方について懇切な注意を與え、以後私的に奏摺を天子に届けることを特許し、そのために摺匣と稱する文匱四個を與える。この匱は長さ八寸八分、幅四寸四分、高さ一寸五分で、外面に黄漆を塗り、内面に黄綾を張りつけてあり、鍵がかかるようになっている。鍵は同じものを二個造りその一個は天子が持ち、他の一個は當人に與えられる。

赴任した該官吏は早速天子に對して到任の挨拶狀を奏摺として奉らなければならぬが、その際に天子に引見された時の訓諭をそのまま復唱して、いつ迄も訓諭の旨に従つて行動すべきことを誓わなければならない。この奏摺を先の摺匣に納め、鍵をかけ外部を嚴重に包裝して北京に向け發送する。この際に總督・巡撫だと驛遞を利用し、或いは武官を派遣して上京させ、宮中の乾清門の入口にある奏事處に至つて堂々と摺匣を提出することができる。然るに從來奏摺を上る權利のなかつた布政司・按察司以下は特に私的の下僕なる家人を、なるべく目立たぬように上京させ、天子が指定した大臣の家に至り、摺匣を提出してそれを天子に取次いで貰うのである。布政司以下は言わば總督・巡撫の屬官であるから、屬官が直接に天子と文通する權利が與えられたとなると、或いは上官たる總督・巡撫がそれに氣兼ねをすることにならぬとも限

らないから、それを慮つての心遣いである。

天子の手許に摺匣が届けられると、天子は自身の鍵で錠をあけて奏摺を取出して讀む。引見の際に下した訓諭の復唱が誤つて書かれていると、硃筆を用いて一々訂正し、天子の訓示はもつとよく覺えておけと諭し、別に要事があれば奏摺の餘白に矢張り硃筆で記入し、これを再び摺匣に納めて鍵を下し、今迄と逆の順序で發送人に返却する。この臣下から奉つた奏摺に對し天子が朱で書きこんだ部分が即ち硃批諭旨なのである。これは言わば奏摺に對する天子の返書とも言うべきものである。

硃批をつけて返却された奏摺を受取つた當人は謹んで拜讀した上、再びこれを摺匣に納めて天子の手許に送り返さなければならぬ。このような天子と官僚個人との文通は絶対秘密に行うことを要し、官吏は自己の上つた奏摺の内容も、これに對して天子から與えられた硃批諭旨の内容も、絶対に他人に洩してはならない。またその内容を筆記しておくことも許されない。そのみでなく、總督・巡撫以外の官吏は、自己が天子に奏摺を奉ることを許されている事實すらも公表してはならないのである。

摺匣を四箇與えられている理由は、それが任地と北京との間を絶えず往復すべきことが豫想されるからである。これ以後、任地における該官吏はその管内における民政、或いは軍事等について細大洩さず、實情を天子に報告しなければならぬ。

このような雍正帝の新工夫、奏摺政治とも稱すべき方式は、中國流に言えば儒家的でなく寧ろ法家的である。何となれば儒家流の政治は、官吏を採用するまで、或いは委任するまでは苦心して探す、一旦採用し委任した後は、一切を任せきりにして傍から干渉しない主義である。委せきりに出来ない位不信用な者ならば、始から採用しない方がよいというにある。

ところが雍正帝のやり方は、地方一省の政治をその責任者たる總督・巡撫に任せ切ることができず、その屬官たる布政

司以下から報告を徴しようというのである。嘗て馬爾齊哈が、論語の文句を引いて「籩豆之事には則ち有司存す」と言つて雍正帝から殿しく叱責されたことがある。雍正帝は

其心を尋ぬるに朕が詳察を加うるを欲せず、彼等自ら黨與を邀結し、任意に擅行せんがためならん（實錄・東華錄、雍正二年五月甲寅條）。

と言つてゐるが、無條件に小數の官僚に權限を委任すると、忽ちそれが朋黨の據點となる虞れがあつたと見てのことである。

四 奏摺と硃批

雍正帝が地方の官僚から奏摺を要求するのは、また地方の實情を的確に知りたいためであつた。彼が陝西寧夏道の鄂昌に與えた硃批諭旨に言う。

今汝等下僚の奏摺するを許すは、朕の耳目を廣めんとするにすぎず。汝の責任外の事にも一切の地方の利弊、通省の吏治の勤惰、上司は誰か公にして誰か私なる、屬員は誰か優にして誰か劣れる、營伍は整飭なるや否や、凡そ人の聽聞を駭かすの事あらば、必ずしも眞知灼見するを待たず、悉く風聞を以て入告せよ。ただ須らく奏中において確據のあるやなきや、抑も或いは偶爾に風聞せしものなりやを分析陳明し、以て朕が更に採訪を加うるに便にせよ。ただ之を密にせよ。汝が叔父の鄂爾泰にも亦、必ずしも知らしめざれ（雍正硃批諭旨第九十二冊、鄂昌。以下書名を略して單に何冊より始める）

右の鄂昌の叔父鄂爾泰は雍正帝が最も信頼した滿人出身の寵臣であるが、この叔姪二人の間においてすら奏摺の内容を知らせ合うことが許されなかつたのである。江南第一の都會たる蘇州に派遣される織造の官は内務府より任命されるので、特に隱密の役を命ずるに便利であつた。蘇州織造、李秉忠に對する硃批に言う。

蘇州の地は孔道に當り、四方輻輳の所たり。其の來往の官員、及び經過の商賈について、或いは遇々關係あるの事あらん。亦まさに留心體訪して明白に密奏以聞せよ（第八十九冊、李秉忠）。

されば地方官僚が天子に奏摺を上ることを許されたのは大きな特權の授與であると共に甚だ重い義務の負擔を強いられたことでもあつた。そしてこの義務を蔑ろにすると雍正帝から督促を受け、叱責を蒙らねばならなかつた。

地方の事宜、若しくは民情、吏治、年歳の豐歉について、何故に未だ一字をも陳奏するを見ざるや（第七十五冊、柏之蕃）。

爾の兄、董象緯は官に居りて惟だ巧飾を努め、廣東に到りてより以來、未だ一の切實の奏を上らず。通省あに一件の朕に聞すべきことなからんや（第四十三冊、董象緯）。

雨澤の情形につき奏報すること、此の如く怠慢なるは甚だ不都合なるに屬す（第七十六冊、楊鯤）。

さればと言つて地方官が、瑣屑な事柄をくどくどと上奏すると、何故にこのような詰らぬことを瀆奏するかと叱られた。

朕は此等の瑣屑の計簿を細覽するに暇なきなり（第十三冊、費金吾）。

爾は身、封疆に任ず。此の如き瑣屑にして奏すべからざるの事を以て瀆奏するは、必ず奏すべきことを以て隱匿して奏聞せざるものあるならん（第十九冊、賽楞額）。

されば奏摺の内容は獨創的な價值あるものでなければならなかつた。若し既に題本を以て上奏すみのこと、或いは當然題本を以て上奏すべきことを奏摺の中に書きこむと、雍正帝は、何故こんな二重の手間をとらせるかと腹を立てるのである。

此くの如く既に題したるの案件について、何ぞ必しもまた一番の煩瀆を重ねんや。これみな居心不實なるが故なり

（第廿六冊、常賚）。

此は當に具題すべきのとなり。何ぞ摺奏するを得んや（第九十一冊、鞏建豐）。

さればと言つて、着任忽々にあまりに早く獨自の政見を打出しすぎてもいけない。

甫めて到任を経て、なお未だ地方の事宜を周知せざるに、遂に此の如き顔色を見ざるの謗論をなすや。一二屬員の書生の管見を聞きて、直ちに率爾として道聽塗説、公然として具摺上奏せしにすぎざるならん。殊に孟浪妄謬の至りに屬す（第三十一冊、法敏）。

雍正帝は地方官僚から廣く奏摺を取りよせたが、單に取りよせただけでなく、それを片端しから讀破し、讀破するにつれて硃筆で教訓を書き與えた。世宗聖訓卷七、聖治、雍正八年七月甲戌の上諭に

各省文武官員の奏摺は一日の間に、常に二三十件に至り、或いは多きこと五六十件に至る。皆朕親しく自ら覽閲して批發し、嘗て留滯することなく、一人の左右に贊襄する者なし。宮中には但に檔案の査すべきなきのみならず、亦並に其事を專司するの人もなし。例えば部中に司員筆帖式書吏等多人の冊籍を掌管し規條を繙閲し原案を稽査する者あるが如くならず。朕、一時の見により、隨つて到れば隨つて批す。大てい其中、教誨の旨多きに居るなり。

と言ひ、硃批諭旨中にも

朕は志を立てて勤を以て天下に先んぜんとす。凡そ大小臣工の奏摺は悉くみな手批するなり。外人はまた信ぜざるならん（第四十九冊、鄂爾泰一）。

とあり、自らが勤勉を以て天下を率いるという意氣であるから、臣下の怠慢には我慢ができない。特に辛苦して與えた硃批が臣下によつて無視され、手應えが少しもなかつた時には肝癪玉を破裂させるのである。

黃叔琳は浙江巡撫に任ぜられてより以來、大いに朕が恩に背けり。朕嚴諭すること既に數次なるも遂に一字の奏覆することなくして、朕が諭旨をそのままに封還せり。憎むべきの極なり（第十八冊、陳世倌）。

汝が光景を見るに、朕が頒賜するところの硃批諭旨を總て未だ過目せざるならん。昏瞶錯謬、何ぞ此に至るや（第十九冊、程元章）。

朕がこれまで汝に誨えし許多の格言は、何ぞただに珍寶なるのみならんや。況んや之は悉く親筆の書する所に係るに、

汝が未だ感激して一字を奏謝するを見ざりき。いま此の如く衆と共に一例に些微の物件を賞賜せらるれば、乃ち長篇大論を以て相煩瀆す。殊に輕重を知らず、大體を識らざるの至りに屬す。惜しむべし、朕が一片の苦心もて汝、此の如き頑蠢の人を訓誨せんとせしことや。これよりまた再び訓えざると共に、また賞賜をもなさざるべし（第三十九冊、石雲倬）。

雍正帝下の官僚としての最大の罪惡は以上のような怠慢と共に、隱匿・不實ということであつた。これは單に政治に有害であるのみでなく、眞實を知りたいという雍正帝の純粹な氣持を裏切るからでもある。雍正帝の眞實に對する追究は、當時の考證學における實事求是の精神とも相通するものがある。

凡そ事は此の如く、實に據りて隠さずして方めて是なり（第十二冊、楊琳）。

汝は丁士傑に對して果して此の言ありしや。それ實に據りて奏聞せよ。朕はただ事の眞情を欲するのみ。丁士傑によりて起見するに非ざるなり（第三十九冊、石雲倬）。

そこで若し匿し立てをすると嚴しく叱責されるが、過失は素直に開陳して詫びればすぐ機嫌を直すのであつた。

二麥の收成について汝が奏せし所の分數はみな甚だ過大なるに屬す。此の如き虚捏は何の益かこれあらん（第廿五冊、何世璠）。

江寧城内、正月以來連次盜を被り、兼ねて旗人兵丁等が種々不法の舉動をなせしことあり。朕は悉く他處より之を聞けり。汝はいま何の顔ありて朕に對するや。若し見ざる聞かざるならばこれ乃ち耳なく目なき木偶人なり。若し知りながら隱匿して奏せざるならば、朕が恩に辜負すること、汝に過ぐる者あらんや（第七十六冊、寧爾泰）。

互いに通同して朕を欺蔽すべからず。たとい爾ら闔省一氣となりて共に相隱瞞せしむとも、朕も亦別に訪聞するの途あるぞ（第四十五冊、尙灤）。

汝は廣州將軍任内において、數文字の欺隱せるあり。朕深く汝のために寒心す（第九十二冊、阿克敦）。

營伍に分派せるの一事は如何なる情由ぞや。それ實に據りて陳奏せよ。如し悔過を知らば朕なお寛恕せん。もしなお欺隠せば、恐らくは必ずしも妥當ならざるなり（第四十五冊、佟世鑄）。

此の如く咎を認めて直陳し、文飾を事とせざりしは、情なお恕すべし。ただ當に奮興砥勵し、以てこの任を忝うするを期せよ（第九十八冊、楊鼐）。

衙門の竊を被りしこと、汝は幸いにして實陳せり。もし匿して奏聞せざりしならば、その禍は測るべからざるものありしならん（第七十五冊、陳王章）。

このような實事求是の精神に徹した雍正帝にとつて、臣下から上られる阿諛の言葉は甚だ厭うべきものであつたと同時に、官僚があまりに卑屈になりすぎて自ら卑下することは、反つて彼の感情を苛立たせるのみであつた。江西布政使の李蘭が「皇上の洪福」と記した文字について、雍正帝の硃批は

朕は深くこの種の虚文を厭う（第三十五冊、李蘭）。

とあり、福建布政司、趙國麟が、自ら「一得之愚」と書いた傍への硃批は

愚字を用うるの處過多なり。朕はあに敢て愚人に昇うるに藩司の職を以てせんや（第九十六冊、趙國麟）。

と戒めている。中國流の單なる形容として濟ませば濟むところまで、彼は硃筆を以て、その行き過ぎの文句を訂正しないと氣がすまなかつた。

（墨字）粉骨碎身せん（硃批）此に至らざれ（墨字）死に至るまで以て報いん（硃批）何ぞ是の如きを用いんや（第八冊、宜兆熊）。

（墨字）臣は毎に官兵聚集の公所に當り、必ず大聲疾呼して委曲に開導しつつあり（硃批）衆人の聽聞を欲するによりて大聲することは是なり。疾呼するは必しもせざるべきに似たり（第四十六冊、蔡良）。

（墨字）賞臣花屯絹兩疋。蜜荔枝一瓶。縫衣有耀。頂踵皆被龍光。懷核親嘗。肺腑長含玉液。（硃批）衣はただ身に

被るのみ。何ぞ頂踵に及ばんや。種はあに嘗むるに足らんや。肺腑に入り難きものぞ。概ね套語に屬し、浮泛にして切ならず（第三十八冊、王士俊下）。

併し時によると、臣僚の卑下の辭をそのまま認めて賛成し、或いは一層ひどい言葉で置きかえることもある。

（墨字）臣は自ら器小にして才庸なるを知る。（硃批）己の態度を以て、一語にして寫し出すこと畫の如し（第廿九冊、沈廷正）。

（墨字）戰慄惶悚の至りに勝えず。（硃批）羞愧汗赧の至りと改めよ（第六十六冊、憲德）。

時には辛辣であり、時には皮肉であつたが、併し若し自己が誤つていたことが分れば、率直に自認することを憚らなかつた。

朕が前諭誤れり矣（第廿八冊、宜兆熊）。

先に嚴に批諭を行いしは一時の見に出でしに係る。ついで各處において訪詢せしに、爾が奏せし所頗る理あるを知れり。前諭は錯りて汝を責めたり矣。別に旨あるをまで（第四十五冊、楊鵬）。

雍正帝の奏摺政治は一面において官僚に對する政治教育であつた。そしてこの教育を受ける官僚の側から言へば、それは大きな試鍊であつた。この嚴しい試鍊に耐えて、終始雍正帝の恩顧の衰えなかつたのは、滿洲人の鄂爾泰をはじめ、漢軍の田文鏡、捐納出身の李衛、その外數名を數えるにすぎない。そして科甲出身の政治家はこの中に加わつていない。それは科擧というものが、兎角朋黨の温床となり易く、科甲出身者は私情にほだされて、公明無私な態度をとることが出来なからだとされた。

雍正硃批諭旨を見て行くと、官僚の奏摺と天子の硃批との往復において、最初は大分に調子がいいなと思つているうち、途中から次第に雲行きが怪しくなり、最後に雍正帝の獨特な惡罵をしたたかに浴せられ、そのまま消え去つてしまう官僚が數多く見受けられる。

迂闊不通の至り（第三十六冊、樓儼）。

満口の支吾、一派の謊詞（第四十五冊、馬覲伯）。

庸愚の極。欺誑瞻徇、昏愚無識の督撫なり（第廿八冊、宜兆熊）。

汝が輩、不忠不誠の凡夫俗子（第四十一冊、岳超龍）。

不學無術、躁妄舛謬（第六冊、石禮哈）。

良心喪盡、無知の小人（第四十二冊、管承澤）。

無知蠢鈍の極（第三十二冊、武格）。

恩に負き理に背く老姦巨猾、國家の法紀を敗壞するの人（第四十六冊、魏經國）。

本を忘れ恩に背き剛愎自用の輩（第三十三冊、伊拉齊）。

大欺大僞、大巧大詐（第二冊、楊名時）。

木石の如く無知、洵に人類に非ず（第廿九冊、沈廷正）。

禽獸だも若かず（第十三冊、黃國材）。

洵に大笑談たり。果して年老いて昏愼せしに係るや。汝それ實に據りて朕に奏して之を知らしめよ（第四十五冊、楊鵬）。

いかに親書中の文句とは言え、このような惡口雜言を臣下に對して放つた天子は、歴代の君主中に殆んど見受けなかつたことである。恐らく西洋近世の獨裁君主の中にもなかつたに違いない。

雍正十年になつて、天子はこの間に山積した臣下の奏摺に殊批をつけた文書をそのまま出版しようと決心した。その目的が那邊にあつたかは色々に考えられる。雍正流の嚴重な政治が世間において必ずしも評判がよくなかつたことは、雍正帝自身も氣づいていたことであらう。特にそれは科甲出身の、從來官界の本流を占めていた官僚間に濃厚に現われていた

に違いない。雍正帝は彼の死後において、或いはこの様な科甲出身閥が再び官界に擡頭して、雍正時代の政治を誹議し、白を黒と言いくるめるのを豫期し、事實は斯の如く動かぬものであると、秘密文書を悉くさらけ出しておく必要を感じたと思われる。

この出版事業は着々進行したらしいが、雍正年間にとこ迄進捗したか、はつきりしたことは分らない。ただこの書中に雍正帝病死の直前に當る雍正十三年八月日付の奏摺を含んでいる所から推せば、全書の完成が乾隆年間に入つてのことは疑いない。しかも嘯亭雜錄の言う所によれば、出版されたのはほんの一部であつて、これに數倍する硃批付きの奏摺が宮中保和殿の東西兩廡に山と積まれてあつたと言う。

こうして出来上つた雍正硃批諭旨は、以上にその一斑を紹介したように、いわゆる世間の史料集とは似ても似つかぬ特異な書である。殊に雍正帝の硃批は明晰無比、一讀して胸がすくような文章である。恐らく天下第一痛快の書と稱して差支えあるまい。

五 題 本 と 奏 摺

官僚には官僚の體制があつて、上下の系統が一絲亂れざる秩序を保つていなければならない。ところで雍正帝が地方の總督・巡撫の屬員たる布按二司、道員知府を自己に直屬させ、奏摺を上らせることになると、それが官僚組織の體系を紊亂する結果を招かないとも限らない。この點については雍正帝は細心の注意を拂うことを忘れなかつた。されば總督・巡撫は使者を北京に派し、乾清門に至つて奏摺を奏事人に提出して天子の許へ届けるのであるが、二司道府は私人を派して北京に至り、怡親王、或いは内閣大學士張廷玉、蔣廷錫等に頼んで密かに天子に轉遞すべきを命じた。嘗て湖南辰沅靖道の王柔が、齎摺の使者が途中にて盜劫に遇つたことを理由とし、使者をして驛傳を利用し、途上を保護せしめられたいと上奏し、また布政司佟吉圖の家人が宮門に至つて奏摺を呈出したのに對し、雍正帝の硃批は

汝がこの奏は不通の至りなり。道府等の員は乃ち小臣に係り、品級卑微にして奏對の分なきなり。朕は聞見を廣めんと欲するに因り摺を具して密奏せしむるを許すも、不時に汝等を戒諭して、張揚洩露し、福を作し威を作して以て上司を挾制し同僚を凌駕するを得るなからしむ。今もし諭旨を明降し微員下吏の家丁差役を以て、概ね驛官をして查驗し兵を撥して防護せしめんとすれば、殊に封章絡繹、道路紛傳するを覺ゆ。何の禮體をなさんや。たとい督撫が摺奏を齎進するにも、亦未だ曾て是の如く事を行うことあらず。兩司の奏摺の京に至るものも、みな廷臣をして代轉せしめ、徑ちに宮門に至ることを許さざるなり。況や汝等末職をや（第七十冊、王柔）。

朕意うに汝等藩司をして若し明かに奏摺を上らしめば未だ物議を免れず。一省の事權専らならずして兩三巡撫あるの嫌あらん。故に前に汝に諭して奏摺を以て怡親王に交して代つて轉奏をなさしめたり。今爾の家人、何すれぞ竟に直ちに宮門に詣りて摺を進めしや（第十五冊、佟吉圖）。

されば兩司以下は特に秘密に奏摺を天子に上ることを許されたので、公式の文書は必ず總督・巡撫に上申し、總督・巡撫の名を以て中央政府を通じて天子に題達するの外なかつた。但し總督・巡撫は奏摺と題本とを以て上奏する權利があるので、案件の性質によつて兩者を使い分けなければならなかつたのである。前述の如く、奏摺は官吏個人としての行動であり、題本は總督・巡撫が公人としての行爲である。故に軍事、中央財政、禮制、重大司法事件、制度の改廢、その他先例によつて定められてある行政事務は凡て題本の形式によるべきであつた。總督・巡撫はこの區別をよくわきまえて、間違いないように使い分けなければならなかつたが、細かい所へ行くとその區別は甚だ困難なものであつたようである。

直隸總督李衛は雍正帝から最も厚い信任を受けた大吏であるが、嘗て管内の人民、魏象樞・魏裔介の子孫から、祖先に賜つた榮典についての謝恩を取次ぐことを頼まれた時に、題本を用いて奏謝したところが、通政司から、こういう際には奏摺を用うべきであるのに誤つて題本を用いたのは不行届きであると彈劾された。そこで今度は李衛自身が雍正帝からは聖祖文集を恩賜されたので、題本を用いずに奏摺を用いて恩を謝したところ、今度はまた通政司から、題本を用いて奏謝

しなかつた點を指摘参効された。李衛は困つて雍正帝への別の奏摺の中でこの點を陳謝しているが、それに對する天子の硃批は

奏本と題本とは、條貫は分れて二となると雖も原と大いに相懸殊するものにはあらず。汝等封疆の諸臣をして慎重に文書を檢點せしむるの意を寓するに過ぎず。汝資歷の深きを以てして、なお程式を諳悉する能わす、其他の服官して未だ久しからざる者は、錯謬を免れざること多きは宜なるかな。然れども朕はこれによりてまた毎に、例に依りて處分することをなさしめざるなり（第八十二冊、李衛六）。

これによると地方總督中の最古参たる李衛でさへも、題本と奏摺との使いわけを誤つたというから、如何にその區別がむつかしかつたかが分る。この李衛がもう一つ奏摺で味噌をつけたのは、原來奏摺は私的な書簡であるから、別に定つた體裁が不要なのに、彼は題本の形式がそのまま奏摺の形式であると思ひこんで、曾て「臣の奏摺は、禮部から頒たれた定式を遵奉して書いた」と奏上したところ、雍正帝から

部頒の式様字數なるものは、専ら題達の本章の爲に言うものに係る。密摺とは關するなきなり（第七十七冊、李衛）。と諭されたことである。そしてこういう八釜しい有職故實は、獨裁君主が臣下を駕御するための一つの武器でもあつたのである。奏摺には程式がないと雍正帝自ら言いながら、その取扱いは矢張り丁重にしなければならなかつた。奏摺には奏事摺と請安摺の別があることを前に述べたが、この區別を等閑にしてはならない。

汝はこの奏事摺を以て請安函内に附し、函面には奏摺二件と標題せり。また禮體に達せずと言うべく、不敬の至りなり（第九十六冊、趙國麟）。

この請安摺は祝賀、或いは季節見舞の禮儀のためであるから、地方官僚はこれを丁重にするために黃綾を用いたが、すると雍正帝は反つてそれを不經濟だとし、奏事摺と同じく白紙を用いしめた。

請安摺に綾絹を用いて面表となすは、汝等鄭重の意にしてなお可なり。奏事摺面に至るまで概ね綾絹を用うるは、物

力艱難、殊に惜むべしとなす。以後は素紙を改用して可なり（第十三冊、黃國材）。

嗣後の奏摺は必ずしも一摺毎に一封套にせされ。兩三摺を併封して可なり。請安摺も舊奏事摺面の如く、宜しく素紙を用うべし。綾絹は殊に惜しむべしとなす（第十二冊、裴律度）。

概して言えは題本の内容は公表された表向きの政治であり、奏摺のそれは封鎖された裏口の政治である。故に奏摺の中ではたとえ拙い事を上奏しても、天子はそれを不問に附することができらる。

此事を爾は幸にして摺を以て密奏せり。因て筆に隨つて批諭し、以て朕が意を示せり。若し具疏して題達せしに係らば、妄言の罪、爾のために寛にせざりしならん（第十六冊、李紱）。

この事、もし或いは具疏題奏せしならば、天下の人は傳えて笑柄となせしならん。汝は實に憐むべきの封疆大吏に屬す（第二十冊、傅泰）。

そこで若し地方官が奏摺で申述べた意見に天子が賛成して、之を表向きに天下に實施しようとする時には、同じ趣旨を改めて題本として上らせる。或いはその手数を省いて、天子がその奏摺をそのまま題本として扱うように内閣へ廻送することすらある。

この摺に照依して具本題奏せよ。例に合せざるの緣由を以て、題本内にて聲明すれば可なり（第六十五冊、高其位）。奏せし所、甚だ嘉すべきに屬す。別疏具題するを庸うるなし。即ちにこの摺を以て部に交して本に改めしめ、諭旨を頒發せり矣（第六十三冊、田文鏡七）。

同じことを世宗聖訓卷七、聖治、雍正八年七月甲戌の上諭に

各省督撫大臣は本章（題本）の外において具摺の例あり。また思うに督撫一人の耳目限りあり、各省の事めに督撫の知るに及ばず、背て言わざる所の者なからんや、と。是においてまた提鎮藩臬に具摺奏事を准すの旨あり。或いは道員武弁等にも間々これあり。此は公聽並觀して外間の情形を周知せんと欲するに非ざるはなきのみ。並に奏摺を以て

本章に代うるに非ず。凡そ摺中奏する所の事、若し行うべき事に屬すれば、是に奏摺を以て進呈するの時、朕その確然行うべき者を見て直ちに該部に批發して施行せしめ、若し疑似の間に介在するならば、廷臣に交與して查議せしむ。また督撫の奏する所にして、批して具本（題奏）せしむるものあり。亦藩臬等の奏する所にして批して督撫に轉詳せしむる者あり（中略）。凡そ督撫たる者、硃批を奉到するの後、若し之を施行に現わさんと欲すれば、自ら當に別に具本を行い、或いは部に咨して定奪すべし。藩臬たる者は應に督撫に詳明し、督撫より具題、或いは咨部するを待ちて後に之を施行に現わすべきなり（中略）。朕が督撫に批諭するの事は、本章（題本）中に引用して以て部臣を挾制するの漸を開くを准さざるなり。則ち奏摺の據りて定案となすべからざるは、又何ぞ言うを待たんや。とあつて、これといよいよ奏摺と題本との區別が判然とする。

このように雍正帝が一方では總督・巡撫の公的な地位を尊重し、題本と奏摺との區別に對する從來の慣習法を恪遵しながら、一方には彼等の屬員たる布按兩司以下と直接に交通する奏摺政治を始めたのは一見して矛盾するようにも見える。併し雍正帝の眞意は、奏摺を上らせることによつて人物を甄別し淘汰しつつ、彼等の朋黨化、封建化を防ぎながら、題本政治を本來あるべき姿に復歸させていこうという試みとして理解さるべきであらう。彼にあつては、奏摺政治は飽迄權宜の手段であり、祖宗以來の題本政治こそ究極の理想であつたのである。

六 硃批諭旨の價值

雍正硃批諭旨の史料としての價值の高さは、雍正時代の政治が、表向きの題本政治と、裏口の奏摺政治との二本立てであつた所から、必然的に導き出される。雍正時代の史料としては、外に世宗實錄、これを基とした雍正朝東華錄、世宗聖訓、雍正上諭、雍正八旗上諭などがあるが、此等は凡て題本の世界の記録であると言ふことができる。而して雍正硃批諭旨だけが奏摺政治の記録の公表された部分なのである。そんならばこの二種の記録は具體的にどんな點で互いに異り、特

に奏摺政治の記録たる硃批諭旨は我々に何を教えるであらうか。

第一に雍正硃批諭旨は前述のように、雍正帝個人と、地方官僚個人との間の私的な往復文書である。故にそこには各人の個性が濃厚に現われてくる。先ず雍正帝個人が殆んど赤裸々に近く現われている。彼は勝氣で自信の強い、負けず嫌いで勤勉な、併し一面には涙もろい性質を具えた、當時の典型的な滿洲人である。實錄や世宗聖訓に出てくる雍正帝は衣冠を纏つた皇帝として近付き難い存在であるが、硃批諭旨に出てくる雍正帝は、此方が誠心を以て向つて行けば向うからも赤心を披瀝して見せる教養ある讀書人である。また奏摺を上る官僚も、ある程度は警戒心を弛めて個人雍正帝に對している。彼等の處世術や、行爲の上に巧拙があり、賢愚が分れているとは言うものの、その間に各人各様の態度が現れていて甚だ面白い。特にそれが當時の官场生活の描寫において眞に迫つていゝものが多い。我々が讀みながら採録したカードには、官场という見出しが斷然多かつたのも當然の結果である。

第二に雍正硃批諭旨の内容は、天子の文章よりも臣下の奏摺の方が分量として多いのであるが、この臣下の奏議は天子の硃批があることによつて、その價直が一層高められてゐる點が注意されねばならない。我々は他の時代の史料を扱う時に、奏議の文章を見れば、すぐとびついて第一等史料として尊重するように習慣つけられてゐる。ところが雍正硃批諭旨を見て行くと、この態度は頗る危険であることを反省させられる。何となれば臣下からの奏摺の内容について雍正帝から隱匿不實だと指摘されたものや、切實でない空論だときめつけられたものが少くない。これで見ると歴代の奏議の中にも、實際の政治から遊離したもの、眞實から遠去かつたものが随分ある筈で、從來のように奏議の文章さへ見るとすぐ鬼の首でもとつたように、片言隻語をも自分の都合に合わせて利用するわけには行かなくなる。それと同時に雍正帝ほどの明察な天子が賛成した奏摺の内容は、相當の信頼をもつて引用することができるであらう。

第三に雍正硃批諭旨は地方官吏から上つた奏摺であるから、地方政治の實情について甚だ價直ある史料を提供する。實錄などは原來が中央政府の記録であるから、地方の事情については餘程の重要な事件でなければ掲載してゐない。然るに

地方官僚の奏摺は殆んど凡てが地方政治に關したものであり、特に各地の天候、米麥の收成分數、穀價などに關する細かい數字が載せられている。この種の報告を奏摺によつて督撫が行うように命ぜられたのは、康熙帝の時から始まつたのだと言ふ（第七十二冊、魏廷珍）。

地方政治の中においても特に重視すべきは地方財政に關する史料である。中國においては財政と言へば凡てが中央財政で、地方財政というものが確立しなかつた。これは獨裁君主制の必然の歸結であるが、但し地方財政の實體そのものは何時の世にも存在していたのである。清朝においてはそれが公項（公費）という形をとり、その財源は賦税に對する何割かの耗羨、及び鹽商などが釀出する規禮銀などから成つていた。その支出は地方衙門の運營費であるが、その中には官僚の生活費をも含む。この官僚の勤務地手當は雍正時代に整理されて、養廉銀の制度が成立するが、養廉銀は全く臨時的な慣例として取扱われているので、題本政治の分野には殆んど姿を現わさず、専ら奏摺の世界で處理されていた。従つて雍正時代の養廉銀成立の事情は、殊批諭旨によらなければ殆んど手懸りが掴めないのである。

しかし雍正帝も始めは養廉銀の制度を朝廷において原則を立てようとして、公けに九卿に會議せしめたが、その中に、養廉銀を公に認めるとすれば、耗羨をも公認せざるを得ず、耗羨は正規の賦税に對する未公認の附加税であることに氣付き、改めて題本の世界から奏摺の世界に移し、専ら各省の總督・巡撫に一任し、彼等の責任において一切を處理させ、天子は單に相談に預るだけとしたが、後にはその相談に預ることさへも拒否した。

養廉の一項は俸薪の比にあらず。題本内に叙入するを得るなかれ（第五十九冊、田文鏡三）。

養廉の議は奏する所に照して支給するを准すも、疏内に叙入するを庸うるなかれ（第六十六冊、憲德）。

耗羨は爾等にありて酌量して之を爲せ。朕が代りて畫定をなすに便ならず（第廿八冊、宜兆熊）。

耗羨の二字は朕が諭すべきの事にあらず（第六十二冊、田文鏡六）。

原來督撫の羨餘・養廉の一事については、朕嘗て未だ一事を批諭せず（第十一冊、毛文銓）。

第四に雍正硃批諭旨には、公文書に現わせない機密事項、或いは朝廷の體裁に相應わしくない瑣屑な事項に關する史料を含んでいる。軍事や外交に關する機密が重要なことは言うまでもないが、當時の官僚が瑣屑な碎事と考へていたことで、我々にとっては重要な史料となることが幾らもある。地方衙門の下級吏員たる胥吏の制度、關稅、公行の狀態、民間の秘密結社、その外數え上げれば限りがない。從來も廣東貿易や洋行の研究には、硃批諭旨の奏摺が必ず引用されて居た程であり、私も嘗て雜誌「東方學」第二輯に「明清時代の蘇州と輕工業の發達」と題する小論をのせ、その中に本書中に見える蘇州の端坊の記事を引用したところ、轉々として諸方の論文に利用されるようになったから、寓目された方も多いだろうと思う。

七 奏摺政治と軍機處

雍正帝の奏摺政治は近世的な獨裁制を一層完全にするに與つて力あつた。獨裁制の下における官僚は、決して人民に對する奉仕者ではなかつたが、併し人民を私有する特權階級であることは許されない。その點においては決して封建君主、或いは封建貴族が一般人民の權利を無視して、獨自の存在價値と存在權利を主張し得るものとは同一視できない。獨裁制は人民の利益と君主の利益とが完全に合致することを前提とする。官僚は君主の恩惠によつて、臨時的にその地位を與えられるもので、君主の利益を侵害してはならぬように、人民の利益を侵害してもならない。人民の利益を侵害することは、同時に君主の利益を侵害し、君主の恩惠に背叛することになるのである。そして君主の恩義に叛くような大それたことは、官僚が個々に離れていては到底出来ないことで、徒黨を組んで通謀してのみ出来ることである。雍正帝の理想は、官僚の私的な黨派を解散し、之を凡て個々に天子に直屬せしむるにある。さてこそここに前代未聞の奏摺政治なるものが出現したのであつた。

併しこういう政治のやり方は雍正帝のような精力絶倫の英主、それも四十五歳という働き盛りの歳で即位した天子にし

て始めてできることである。もしも代が變つて別の天子が位に即けば必然的に變更を餘儀なくされるものであることは始から豫見されていたであらう。

そんなら雍正帝が亡くなると共に奏摺政治が消滅して、政治の中心は内閣へ逆戻りしたかと言えばそれは不可能なことであつた。一度始められた新しい政治方向は、始まつた以上無條件に逆轉すべくもない。併しながら雍正帝の後に立つた乾隆帝は英明とは言ふものの、まだ二十五歳の青年天子である。雍正帝のように全國の官僚の一人一人を指導し願使して行く程の力量はまだついていない。そこに必然的に起つたのが軍機處政治であつた。

軍機處の起原については從來はつきりしたことが分らぬとされていた。私は嘗て「東方史論叢第一」に「清朝に於ける國語問題の一面」なる小論を發表し、主として文書翻譯の煩雜を省く必要から、内閣政治が軍機處政治に移行せねばならなかつた経過を述べておいた。今や、私は更に雍正帝の奏摺政治の中から軍機處が生れ出たものなることを附加えねばならぬ。

雍正帝は清朝の宿敵たる西北準噶爾部との間に新しい衝突が起つたので、宮中に臨時に軍需房なる參謀本部を設けた。清史稿軍機大臣年表によるとこれは雍正七年六月癸未のことであり、怡親王と、内閣大學士張廷玉、同蔣廷錫の三人が、密辦軍需事宜に任ぜられている。後に雍正十年にこれが辦理軍機處と名を改められ、その大臣も辦理軍機事務と稱せられるに至つた。この軍機處の任務は西北軍務を處理するにあるが、その處理の仕方は、雍正帝の奏摺政治と題本政治との中間を行くものである。即ち前線の將軍からの報告は、奏摺の形式で乾清門にある奏事處から天子の手許へ届けられ、通政司をも内閣をも通さない。ただ普通の奏摺だと天子一人が披閱し、一人で處理するが、西北軍務の奏摺は軍機處大臣が相談に與かる。恐らく雍正帝の時から、軍機處大臣は擬旨を行つていたと思われる。擬旨とは大臣が天子に代つて、臣下からの奏請について返事の言葉を用意しておくことで、天子の裁決をまつて確定的な天子の命令となるのである。この擬旨（また票擬）こそ内閣大學士の職務であつたので、軍機處は言わば内閣の分局であつたわけである。事實、初期の軍機大

臣は概ね内閣大學士の中から選拔されている。

雍正十三年八月に雍正帝が歿して乾隆帝が即位すると、辦理軍機處の外に總理事務處なるものが置かれ、やがて十月に辦理軍機處が總理事務處に吸収されてしまった。これは總理事務處が軍機のみならず、天下の奏摺を處理する公的機關となつたことを示す。間もなくその名稱は再び辦理軍機處に逆戻りしたが、實質は依然として一般政務をも兼ねて辦理した。そこで従來は裏面的な存在であつた奏摺政治がそのまま表面に浮び上つてきたのである。そして裏が表になると共に、奏摺政治も質的に變化して來なければならなかつた。それは奏摺政治の法制化である。

雍正帝の奏摺政治は彼の獨創になり、彼の個性を中心として運營された。奏摺政治には一定のルールがない。雍正帝がその殊批諭旨の卷頭に掲げた自序の中で述べているように

この中に兩人が事を奏して朕の批示の迥かに異なる者あり。これは則ち人によりて施し、材を量りて教うるなり。嚴急なる者は之を導くに寛和を以てし、優柔なる者は之を濟うに剛毅を以てす。過ぐる者は之を裁し、及ばざる者は之を引く。讀者は當に朕の苦心を體すべきなり。

であつて、法則にも先例にも拘束されず、またそれが法則とも先例ともならず、凡てがただ雍正帝という人格において統一されていたのである。彼の殊批は、人を見て法を説く主義で、各人に對して各様の教訓を與えていたが、彼が創り出した奏摺政治は、彼が運營している間はそれでよかつたのである。

然るにこの型式が子孫に受けつがれ、而も半ば公開されて大臣までが参加することになると、何等かの基準が必要とされ、少くも先例が堆積する間にそれが慣習法を形造つて行くことは免れ難い運命である。このような軍機處の奏摺政治を法制化して一つの制度に纏めるに與つて力のあつたのは、滿人官僚を代表する鄂爾泰と、漢人官僚の領袖たる張廷玉との二人の軍機大臣であつた。そして奏摺政治は次第に題本政治の分野を侵蝕して、天下の政治は内閣を離れて軍機處を中心として運營されるようになった。また奏摺が既に公的地位を獲得した以上は、それが軍機處の擬旨を経て天子の裁可を得

れば、直ちにそのまま効力を發生することになり、これを奏准・と言ひ、内閣を経た題准と等價直なることを認められた。兩者は何れも天子の裁斷であるから、後世を拘束する先例となり得るのである。

奏摺政治の分野の擴大は、同時に題本政治の凋落であり、最も重要ならざる報告事項だけが題本として内閣を経過するようになつたが、最後に光緒二十八年に至り、一切の題本は凡て奏摺に改められ、明代から始まつた内閣による題本政治が消滅した。これを改題爲奏と言う。

ここに同治六年の自序を有する、宣崧生の著、奏摺譜と稱する書があり、私の持つてゐるのは光緒庚寅（一八九〇年）、京都二西齋藏板と題するものであるが、この書は奏摺政治が極度に達した頃、奏摺の實際の運用法を述べてゐる點で興味深い。これによると同治時代の奏摺はそれより百四十年以前の雍正時代の奏摺とは種々の點で頗る異つたものになつてゐる感じを受ける。雍正帝は奏摺には一定の書式がないと言つたが、奏摺譜は主として書式を述べたもので、煩瑣なまでにそれが形式化されてゐることが分る。雍正帝は請安摺にも綾絹を用ゐるな、と戒めたが、奏摺譜にはちやんと黃綾を用ゐよと書いてある。官吏を参劾するには例として題本を用うべきだが、今はみな摺を用う、とことわつた所もある。奏摺譜に記されてゐる此等の制度の成立は徐々に習慣が集積した結果であるらしく、書中に先例となつた乾隆中の上諭や、嘉慶十七年刑部議定應奏條貫の如きものを引用するが、奏摺に關しての纏つた法典は出来てゐなかつたらしい。ただ注意すべきは、この習慣法の堆積の中に、雍正帝時代の偶然な故事が生かされてゐることである。

奏摺譜の禁令の條に、朝乾夕惕の四字は用ゐることを忌む、と記してあるが、これは雍正時代の有名な年羹堯事件が尾を引いてゐるのである。言うまでもなく年羹堯は奏摺の中でこの四字の順序を變えた上に誤字を書きこんだために、日本の國家安康のような筆禍事件を惹起し、失脚した上に身の破滅を招くようになったのである。その外、洪福齊天とか、來歲必獲豐年とかいう句を用ゐるなど注意してゐるのは、雍正硃批諭旨の中で天子が屢々排斥してゐる語句だからである。

雍正帝の奏摺政治が後世に與えた影響の大なるものとしては、この外に幕友政治の流行がある。奏摺は原來秘密文書で

あるが、雍正帝自ら、著しく秘密でない奏摺は他人に代筆させても構わぬと申渡していることもあり、此に胥吏に非ざる胥吏、士大夫的な胥吏とも言うべき幕友の活躍する分野が開けてきた。幕友政治は雍正から乾隆時代を頂點とし、その後次第に墮落しながら清朝末年まで繼續した。ここに胥吏の學問とも言うべき吏學の外に、幕友の學問としての幕學なる名稱が發生した。これも奏摺政治の一影響である。

なお其他に雍正帝の奏摺政治について語るべき點は甚だ多いが、與えられた紙數も既に超過したので、機會を待つて補足することにしよう。

〔附記 本研究および本號掲載の各研究は昭和三十一年度文部省科学研究費の交付によつて行われた雍正時代史研究の一成果である。〕

〔餘白錄〕 象の後退

最近新聞紙の報道によると、中國雲南省の南部、ビルマ國境に近い瀾滄江周邊の大森林中に二十頭乃至三十頭の野生の象群が棲息していることが發見されたと言う（大阪朝日、昭和三十三年三月五日）。中國では南北朝時代までは揚子江の線まで時々野象が出沒した。劉宋の沈攸之は江陵城北數里に現われた象三頭を格殺し、梁の天監六年三月には三象が京師に入つたと見えてゐる（宋書卷七四・梁書卷二）。それが五代宋頃になるとずつと南の五嶺の線まで下つてきた。南漢の時代、東莞縣に群象が出て稼を害したので官が之を殺し、禹餘宮使の邵某がその骨を集めて資福寺の前に石塔を建てたという（南漢春秋卷十二鎮象塔）。また宋代に福建路の漳州漳浦縣の山に群象があつて民患をなすので、政府は捕虎の賞格により人が之を捕殺しその牙を賣りて官に入ることを許したことがある（續資治通鑑長編卷二四九、熙寧七年正月庚申條）。これで見ると古代には恐らく黄河の邊まで棲んでいた象が次第に人間に追われて後退したと思われる。兎角人間という奴は自然界で一番の嫌われ者らしい（宮崎）。

Notes on Emperor Yung-chêng's "Instructions in Red"

雍正硃批諭旨

Ichisada Miyazaki

The reign of Yung-chêng was a transition from the political system of the Manchus to that of modern Chinese despotism. The Manchu dynasty entrusted its provincial governors and military commanders with full power, and the liaison between the central government and the provincial governments was kept by means of reports submitted to the emperor through the Cabinet by the governors and commanders. In addition to these official reports the governors and commanders were allowed to submit to the emperor confidential personal addresses. Emperor Yung-chêng also allowed other high ranking provincial officials to present this kind of personal addresses, and his purposes seemed to be well acquainted with the actual situation in the provinces and to prevent his governors and commanders to become like feudal lords. It became, therefore, the emperor's daily duties to read several scores of addresses and send them back with "instructions in red." Imperial Instructions in Red of Yung-chêng is a collection of such addresses and instructions, which constitute a unique source material for Yung-chêng's politics behind the scene in contrast with his official Edicts and the Veritable Records of his reign.

The Militia under Ming and Ch'ing

Tomi Saeki

Under the Ming in such frontier provinces as Shen-si 陝西 and Shan-si 山西 the militia played the role of frontier guards side by side with the regular soldiers. When in the latter days of the Chêng-t'ung 正統 era of Emperor Ying-tsung 英宗, Esen of Mongolia invaded north China, the militia were recruited from various provinces and became a permanent organization to take part in frontier defense because of the relaxation of military discipline on the part of the regular army. Since the militia were recruited from among the peasants throughout the country, the institution became a heavy burden upon the peasantry, while the